ふつさ10話

福生の名の由来

福生という名が歴史にはじめて登場したのは中世で福生郷といいました。ところでこの地名、よその人で「フッサ」と読める人はそうざらにいないでしょう。では、この地名のおこりは何でしょうか。3つに大別できます。①総生（フサウ）起源説。総は麻のことで、総生は麻が広々とした原野で栽培されているの意。②地形・地質起源説。「阜沙」ということで、陸丘とかの意。③アイヌ語起源説。フッチャ(湖口)、ブッセ(湧水)、フッサ（水で清めるみそぎ）の意。

いずれも水に関係した言葉ということです。

福生の段丘

市は、武蔵野の南縁西部、台地の南を流れる多摩川により形成された数段の河岸段丘上にあります。段丘は、上から立川面、拝島面、低位2段の段丘からできていますが立川面には八高線が、拝島面には青梅線が走っています。玉川上水は、これらの段丘を利用して造られています。段丘下の多摩川の沖積面はかつて市唯一の水田地帯が開けたところでしたが、最近は都市化に洗われ、住宅地に変わりつつあります。

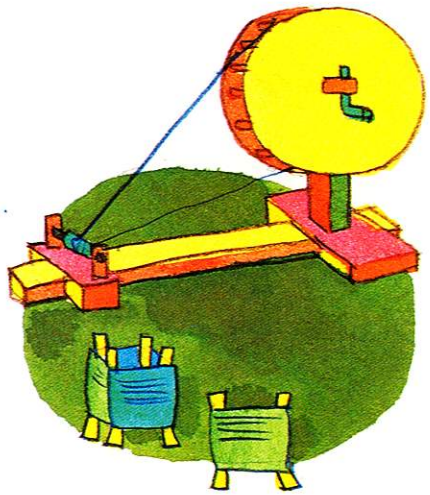
長沢遺跡

福生駅からほど近い神明社と第一小学校の間に、およそ4万平方メートルにおよぶ大規模な縄文中期時代の遺跡があります。この周辺は建設工事などで、早くから多数の土器や石器が出土していましたが、記録されることもなく破壊されてきました。

昭和45年から52年までに3回発掘調査が行われ、加曽利式土器をはじめ打製石斧など多数の出土品が発見されています。出土品は中央図書館内の郷土資料室で展示され、市民や子供たちの歴史の勉強に役立てられています。

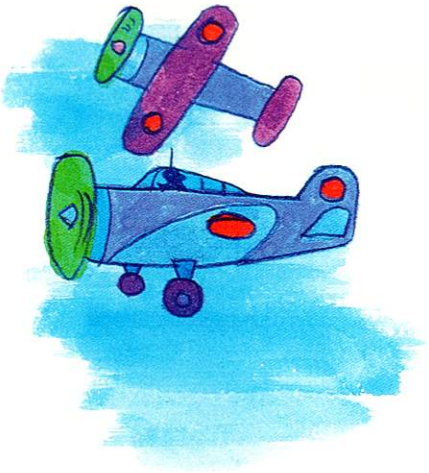
農村福生

今から半世紀まえ、日本の農業のエースといえば養蚕。もちろん、市でも同様で、他の農産物の10倍もの収益がありました。当然、製糸工業もおこり、工場も4社を数え、自家製糸も農家の副業としてさかんに行われ、まさに“お蚕様”ブームといった感がありました。織物工場にいたっては、その数15、機械台数45、大半が手動式。農家からカッタンカッタンと鳴る織機のリズミカルな音が聞こえてきたものです。



福生の歴史

福生に軍事施設ができたのは、昭和14年でした。その年、日本陸軍航空本部は飛行場の適地に福生を選び、ただちに土地買収が行われたのです。売却面積は北部一帯の山林中200haで、ここに日本陸軍航空整備学校が建設され、以後しだいに拡大。終戦時、陸軍施設は米軍に接収、米軍横田基地として再出発しました。商店街も急速にのび、基地の町として特異な発展をとげ、現在にいたっています。

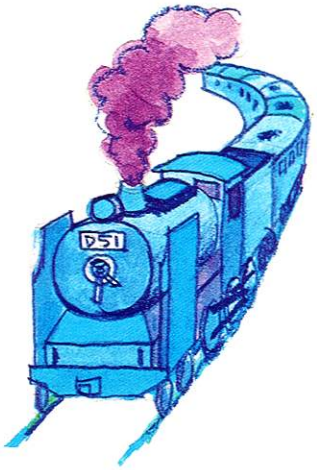


鵜飼の解禁

"解禁"。その日を今か今かと待ちかまえる太公望の胸の高鳴りが伝わってくるようです。鮎漁といっても今は、釣漁だけですが、その昔は、多摩川ではさまざまな漁法が見られたものです。鵜飼といえば、長良川――という人には意外かもしれませんが、多摩川でも昭和の初めごろまで鵜飼漁が行われていました。長良川のものと違い、鵜匠は徒歩で鵜をあやつる徒歩（かち）鵜飼で、夏の風物詩ともいうべき味わいがありました。

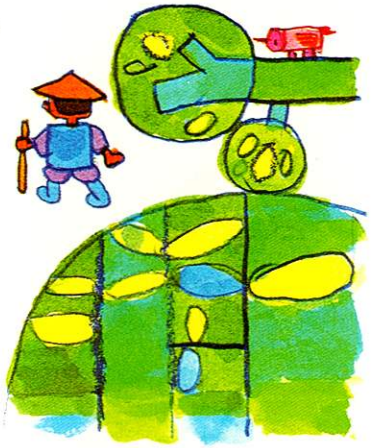
八高線

青梅線明治27年、五日市線大正14年、八高線昭和５年。八高線はレールが敷かれたのも最後なら、蒸気機関車が去ったのも最後でした。当時、養蚕がさかんで絹糸や絹織物などの集荷に必要なためと、軍事的な考慮のため、八高線が敷設されたとか。最初の計画では福生に建設の予定がなかった東福生駅を、チビッ子たちのさかんな声援をあび、措しまれながら、東京最後のＳＬＤ－51が消えたのは、45年９月17日のことでした。



めがね橋

昭和51年、百年もの間、地元住民から愛されてきた"めがね橋"が解体され、コンクリート造りに生まれ変わりました。"めがね橋"はほんとうは牛浜橋といい、明治10年、熊川村住民の総意で民費をもって従来の木橋を石橋に架け替えたもので、玉川上水唯一の石橋であるとともに、めがね橋形式の石橋として、日本で最も早い時期のものでした。これは、当時の戸長石川弥八郎が二重橋、日本橋、江戸橋、浅草橋、万世橋を見て、その技術を評価し、村民ぐるみで実現したものといわれます。



文学散歩

福生玉川上水近く、森田殷史翁宅の庭に、「友昇塚」と刻まれた碑が建っています。この友昇がどんな人物か知らない人も、松尾芭蕉は知っているでしょう。福生出身の森田友昇（太四郎）は幼児から俳諧を好み、長じて明治12年、松原庵四世宗匠となり、芭蕉７つの愛蔵品のひとつ"四山の瓢"と一緒に芭蕉直系第８代をつぎました。その生涯を通じてめとらず、酒と旅を愛し、明治27年行脚のワラジをはくや、二度と福生に帰らなかったといいます。

野鳥

春夏秋冬。四季のうつろいが美しい多摩川はまた、野鳥たちの格好のマイホーム。春から夏にかけては、野鳥たちがいっせいに巣づくりをはじめ、草茂る川辺や水面をあっちに行ったり、こっちに来たり、じつに忙しげに動き回ります。ヒバリやチドリ、オオヨシキリなどがひっそりとヒナを育てているのかも。秋から冬にかけてはシベリアからカモ類の冬鳥がやってきます。市域には今、約20種の野鳥がみられます。